

### 3 研究主題と副主題の捉え方

先述の県小教研国語（書写）部会の研究主題「言葉を大切にし、自律的に学ぶ子供の育成」を受け、本校では、子どもの目的意識や子どもの「知りたい」「やってみたい」という思いや願いを継続・深化させながら活動する自律的な（子どもが主体となった）学びを大切にして、研究・実践に取り組むことにした。子どもが自律的に学ぶための原動力は何か。それは、これからの学習活動に自らの問いや目的意識をもっているかである。もっと言うと、「～したい」「～やってみたい」「～について知りたい」「～を伝えたい」という思いや願いがあるかないかである。その問いや目的意識があるからこそ、ものごとを追求し、問題を解決しようとする。その姿勢は、国語教育のみならず、これからの子どもたちの学びや生き方に大きく影響すると考える。そして、自律的に学ぶなかで、自分の周りのもの・ひと・ことと深く関わり、自らの問いがどんどんと深くなり広がり、更新されていくであろう。

そこで、本研究の副主題として「自らの問いを追求する子どもをいかに育てるか」を設定した。「自らの問い」「追求する」ということにこだわりたい。他者から与えられた課題ではなく、自らがもった問い。そこには、一人一人違いがある。同じような問いをもっていたとしても、一人一人個性が違いうようにその子なりの思いがある。また、自らの問いが全体の問いとなったり、他者の問いが自らの問いになったりすることもある。そのように、自らの問いは、変化し、積み重ねられ、更新されていく。自らの問いを追求すれば、問いを解決できることもあるが、さらに新たな問いがうまれることが多い。そして、それを解決しようとさらに追求していく。その問いを追求することが学びであり、自らを切り拓いていく力となっていくと考える。

#### 「自らの問いを追求する」とは ～ 本校の大切にすること ～

##### ○「自らの問いをもつ」

子どもたちが主体となって学習する原動力になるのは、「～はどうなっているのだろう」「～について知りたい」「～やってみたい」という子どもの思いや願いである。それが無いところに、主体的な学びや自律的な学びはあり得ない。子どもが自分事として本気で学習に取り組むためには、自らの問いをいかにもつかが肝になる。しかし、自らの問いをもつことが目標ではない。無理矢理自らの問いを考えさせるものでもない。素材（教材）と出合う時や学習活動のなかで、子どもたちの心を揺さぶり、子どもたちのなかに自然と問いが生まれるような環境、学習活動内容、支援をどのようにするかが、わたしたち教員が力を入れるところである。また、必ずしも、初めから自らの問いをもたなくてもいい。学習活動が進み、様々な意見や考えにふれるなかで、自らの問いが生まれることもある。

##### ○「追求する」

子どもが自らの問いや目的意識をもてば、進んでいろいろなひと・もの・ことと関わり、どうにかしてその問題を解決したり、目的を達成したりしようとする。いかに子どもが本気になって自分事として取り組んでいるか、わたしたち教員はそのような姿勢を期待し、そのような態度を育てたい。わたしたち教員が、出すぎてはいけない。子どもが必要としている時に必要としている支援ができるかどうかは、丁寧な子ども理解にかかってくる。学習活動において、わたしたち教員が子どもの追求する姿をいかに捉えるかということも、大切なことである。